

伝統の伊予生糸を受け継ぐ人々

世界的に評価される高品質の伊予生糸。その産地には伝統と誇りを未来へつなげようとする取り組みの人々があります。

写真提供／西予市



「1本だと弱々しい糸が繰り合わされることで丈夫になり、長くもつ着物になるところに面白みを感じます」と繰糸工の井関さん。



白さと嵩高（かさだか）が伊予生糸の特徴の一つ。通常、カイコガが出てこないようにするため熱風乾燥させるが、ここでは5～6℃で冷蔵保存したものを原料としている。



水分を多く含んだままの繭をゆっくり繰る「生繰り（なまぐり）法」という方法でとる。



西予市野村シルク博物館は実習室を併設する。糸づくりから着物を仕立て上げるまでを習得する「織姫染織講座」の研修生を毎年受け入れている。



国内外で高く評価される愛媛県産の伊予生糸

「シルクの町」とも呼ばれる四国地方の名産地が、愛媛県西予市です。生産される伊予生糸は「カメリア」（英語で白ツバキの意味）という名で商標登録され、その柔らかな風合いと光沢のある白さは国内外で高い評価を受けています。伊勢神宮の式年遷宮で献納される御料生糸に採用されたほか、かつては英国のエリザベス2世が戴冠式で着用するドレスにも使用されました。

西予市でつくられたすべての繭を集め、糸に加工するのが、野村シルク博物館です。愛媛県にはかつて3つの製糸工場がありました。伊予生糸のやわらかさの秘訣は、糸の繰り方にあります。

繰糸工の井関奈央さんは「一般的な機械は繭からの糸が足りなくなると自動的に足してくれませんが、ここで使っている機械は人の手で足しながら、ゆっくり繰っています」と説明します。

この方法では量はできませんが、機械の強い力で引っ張らない

の苗の増殖に取り組んでいます。

こうした動きを後押しするように平成28年、国が農林水産物を地域の財産として保護する「地理的表示保護制度（GI保護制度）」に伊予生糸が登録されました。中国・四国地方では、食品でない農産物での初の登録でした。

伊予生糸保存の機運が高まる中、新たな養蚕農家も生まれています。平成29年に養蚕の世界に入った松山紀彦さんは「農業委員会を通じて70aの畑を確保することができ、桑苗は西予市から無償でいただけました。今はベテランの養蚕農家の方に指導いただいている

ところです」と言います。

今後1年間の研修を経て平成31年に独立する予定の松山さんの目標は現在所有している2000本の桑をきちんと育てて、5000本に増やすこと。

「昨年10月には試験的に6000頭のカイコの飼育を行いました。初めて繭ができた時は、感動しましたし、自信にもなりました。多くの方々の力添えに応えるため、伊予生糸の生産と発展に貢献するつもりです」と松山さん。

地域の人々が力を寄せ合うことにより、伝統は確実に受け継がれようとしています。



松山さんは試験的な飼育で繭の出荷に成功した。

以前、漁協職員として真珠養殖の技術指導をしていた松山さんは「同じ生物に関わる仕事ということで興味を持った」という。

地域の思いを受け止める新たな養蚕農家

内外で価値を高く評価される伊予生糸ですが、原料となる繭を生産する農家は激減しています。最盛期の昭和初期には1883戸あった農家は一時期わずか6戸に。生産者は高齢化し、平均年齢は80歳近くになりました。

危機に瀕した生糸を守ろうと、愛媛県が主導する形で、西予市や野村シルク博物館、生産者などが伊予生糸産地再生協議会を結成したのが平成26年度のことです。

協議会は、生産者を増やすため、新規参入希望者がすぐに養蚕に取り組めるよう専門器具や機材を確保しました。また県や市、JAの職員、生産者など有志30人が桑

一人前の養蚕農家を目指して地域おこし協力隊で挑戦



東京から一ター、桑の生産に取り組む福林さん。

「着物好きが高じて絹、さらに養蚕に興味を持つようになりました」と言う福林奈央さんは、養蚕農家を目指し、平成28年9月に東京から移住し、西予市の「田舎で働き隊」の一員になりました。「まず桑園を整えて、使える状態にするのが第一歩です。勉強を始めたばかりですが、熱中しています」。



遠く有明海から
島原半島まで望
む標高600mの
広大な桑園。



工場内のカイコは、生育に適した温度と湿度が保たれた部屋で育つ。

カイコの成長
段階に応じて
トレイを乗せ
換えて、分散
させていく。



繭を作るための「簇（まぶし）」と呼ばれる容器。

桑の葉を粉にして保存し 加工して与える

伝統的な養蚕法の場合、カイコを育てる時期は、エサとなる桑の葉が茂る春から秋だけであるため、多くの場合、年3回くらいしか繭を生産できません。

山鹿市の工場では、人工飼料を用いることにより、年24回の生産が可能になるシステムの確立を目指しています。

人工飼料の原料にする桑葉を栽培するため、工場の近くの標高600mほどの山の上の牧草地の跡に25haの畑を造成し、「天空桑園」と名づけて、8万本の桑を植えています。

完全無農薬で育てた桑の葉は、

山鹿から日本の蚕業を 再興するという決意

現在、工場では本格稼働に向け

刈り取った後、速やかに工場に運んで、破碎、洗浄し、乾燥させてから粉碎し真空状態で保管します。カイコに与える際は、粉状にしておいた桑の葉と副原料を練り合わせて、シート状に成型し、滅菌処理します。

この人工飼料を用いることにより一年中飼育できるのです。そのうえ、カイコが繭をつくるまでの30日間にたった3回、人工飼料を取り換えるだけですむので、生産者にとって重労働だった1日3回のエサやりの手間を大幅に省くことができます。

た試験的な飼育が行われています。島田さんによると、繭の生産量の目標は年間50t。これは国内最大の産地の群馬県の年間生産量に匹敵する規模です。また数年以内に遺伝子組換えカイコの飼育に取り組み、最終的には医薬品の原料を供給したい、と考えています。

山鹿市を米国のIT産業の集積地であるシリコンバレーのように関連企業や研究施設の集積を図り、雇用を創出して地域経済の活性化につなげたい、とする島田さん。「山鹿市だけで事業を完結するつもりはなく、全国で蚕業に取り組み合っている皆さんとつながり、力を合わせることで明るい未来を実現できると確信しています」とも言います。

新たなシルクの利用に かける思い

平成29年11月、熊本県山鹿市の市民交流センター文化ホールで、やまが新シルク蚕業構想推進協議会主催の「2017年新シルク蚕業サミットinやまが」が2日にわたって開催されました。国内外から、研究機関、企業、行政機関などの関係者が集まり、新技術などについて活発な意見交換を行いました。

両日で555名の来場者があるなど盛況を博し、シルクへの関心の高まりが感じられる催しとなりました。

一年中、カイコが育つ 無菌養蚕工場

熊本県北部に位置し、かつて九州地方における有数の繭の産地だった山鹿市では、養蚕農家が減少の一途をたどり、ついに2戸を残すだけになりました。

一方で、伝統の養蚕業を新たな形で復活させる取り組みが始まっています。

山鹿市は、株式会社あつまるホールディングス、農業生産法人株式会社あつまる山鹿シルクとの3者で協定を締結し、平成28年に「新シルク蚕業構想—SILK on VALLEY YAMAGA」を打ち出しました。

この構想の中核となる施設が、年間を通じてカイコを飼育できる巨大な養蚕工場です。

「カイコは伝染性の病気にかかることがあり、経営面に不安定さがありました。この工場は外気に触れないクリーンルームで温度や湿度を安定させて飼育するので、安定的な生産が可能なのです」。そう説明するのは、工場の建設と運営に当たるあつまるホールディングスの常務執行役員・島田裕太さんです。

平成29年4月に、廃校となった広見小学校跡地に工場が完成し、6月末に最初の繭の生産に成功しました。

生産地を訪ねて | 熊本県・山鹿市

立ち上がった世界最大級の 養蚕工場

海外産の生糸に押され、斜陽産業と見られがちな日本の蚕業ですが、
新たな形での復活を目指す取り組みが始まっています。

山鹿市では最新鋭の養蚕工場が稼働しました。

撮影／島 誠 写真提供／株式会社あつまるホールディングス

総工費23億円を投じて
造られた建設面積4174
㎡の NSP 山鹿工場。



プロジェクトの進捗報告
をする島田さん。



会場には多くの養蚕
関係者も集まった。

